内モンゴル紀行

進藤賢一

一、はじめに

モンゴルは12世紀から13世紀にかけてチンギス・ハーンの強大な帝国創設で世界史に登場した。最盛期には東西数千kmに及ぶユーラシア大陸を領土として権勢を奮ったのである。しかし、その後数世紀、帝国の縮小と勢力の後退に伴ってモンゴル人の居住地域は分散し、あるいは同化、移動・敗走して、今日では「飛び地の捨て子」の表現すら生まれる結果となった。

いかにもモンゴル人を侮辱するこの言い方は、過酷な自然条件が災いして、遊牧のような低生産力のもとでの生活様式を保ち続けてきたことや、多くのモンゴル民族が20世紀社会主義的生産様式に組み込まれ社会の自由な発展が阻害され、民族の主体性が十分発揮できなかった結果、多少なりとも見下した観点から「捨て子」の蔑称を与えられたのかもしれない。

同じ様な解釈は、第二次大戦前張家口に置かれていた徳王府秘書長のチョクバーダルホが〝蒙古人の欠陥は外部から自分に課せられた境遇を宿命的なるかのごとくみて甘受しているところにある〟（飯塚浩二「戦争末期の蒙疆」p148）の一文にも読み取ることができる。

遊牧は自然の草と水を求め家畜群を伴って人間も移動していく原始的放牧方式と決めつけられてきた。つまり、人間が主体的能動的に牧畜を行うのではなく、家畜に人間生活が従属させられてる、との感覚である。

英語で遊牧は「ノーマデック・ハーデング」である。ノマドは放浪、ハードは本来家畜の群れを意味するが、軽蔑的、侮蔑的な人間の群れ、大衆といった内容も含まれているので、英訳そのものがあまりいい響きとして伝わってこない。

21世紀以降を展望するとき、こうしたデアスポラ（民族分散）は、これまでの先進的経済大国にとって羨ましいまでの人間性を生かし得る、また未来に大きな可能性を残していける民族であり、土地になるであろうことが期待できる。なぜなら、そこに育まれ、教育されている人々には、地球上の文明国家が経済優先などで失った環境、荒れた自然とは異なる大地があり、彼らは将来にわたって牧畜で生きていこうとする夢を持ち続けていることである。多くの若い人々はユーラシア大陸の広大で美しい自然と一体化して生きていこうとする心意気があるからだ。

いくら民族的差別意識をもつ人間でも、土地の人の心のなかには入っていかれない。この点は、この際肝に命じていておきたいものである。

モンゴルといっても、モンゴル人の生活舞台になっている地域はモンゴル国（かつてのモンゴル人民共和国）、中国の内モンゴル地区、ロシアのブリアート共和国から中国のシンチャンウイグル自治区（大半はタリム盆地）や

遠くボルガ河畔のカルムイク共和国あたりにまで分散しており、広大な範囲に及んでいる。

モンゴルの人々は、農耕に不適な乾燥限界地帯、不毛地帯に僅かな草で家畜を育てる遊牧の仕事に従事してきた。ゲル（漢語ではパオ）で住居を替えながらのノマド生活であり、国境を越えてのデアスポラの状況を続けてこざるをえなかったのである。

そして、デアスポラは、モンゴル人の民族的意志とは別に外的強制によってやむなく今日的状況が生み出されたと見るべきであろう。

ユ・ヒョヂョン（「国境みまたがる民」変容するモンゴル世界＝p30）は、〝モンゴル人ないしモンゴル系諸族が、今日のように、中国、ロシア、モンゴル国などに分かれているのは、モンゴル人自身の意志によるものではなかった、ということである。モンゴル高原を取り巻く大国や大きな民族の関与がなかったら、彼らは他の諸民族の例のごとく、統一に向けての行動を続けてきたはずである〟として17世紀初頭、清朝の支配を逃れて辺境域に住み着いたオイラトや20世紀中ごろ、ソ連と敵対しドイツに協力したとして中央アジア、シベリアに強制移住させられたカルムイク人などにみられるように、民族的統一や居住圏の統合を妨害する外圧と闘いつつ、今日の生活地域が形成されている、という。

我々は長い間、モンゴル＝ステップ＝遊牧＝ノマドといったイメージでこの民族を表象してきたのだ。

羊、山羊、馬、らくだを労働手段とし、広大な草原を労働対象として生活を営む民族集団であるが、家畜の移動に引き回されて人間が居住空間を移動することを原始的とのレッテルを貼って眺める認識が我々にある。

また、中国の内モンゴル自治区はモンゴル人をマジョリテイと誤解している節がある。

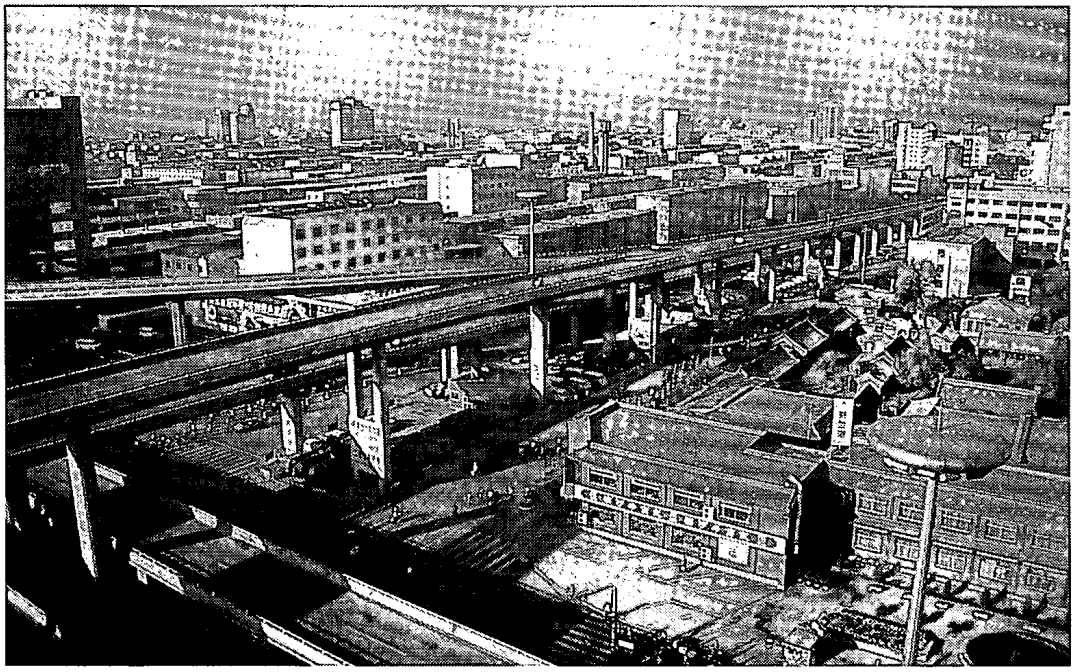
実際問題、モンゴル国は人口235万人、内90%がモンゴル人であるが、内モンゴル自治区はモンゴル族は357万人とモンゴル国より100万人以上も多いのに、モンゴル族比率は僅かに16%弱である。マジョリテイの漢民族は約80%で、他は回族、満州族、ダオール族、オロチョン族　ミャオ族、トン族等47民族が住むいわば混住地域なのである。だから、文化の複合・融合地帯の性格をも合わせもっているといえよう。

第二次大戦末期、〃漢人には手をつけていないが、蒙古人には徴兵制に似たものを実施している。但し、学校に通っているもの、ラマ寺に入っているものは同制度から除外してある〃（飯塚浩二：「戦争末期の蒙疆」p154）のように、漢人よりも悪い条件のもとに置かれていた中国内モンゴル自治区のモンゴル族は、今日では逆に少数民族優遇策が適用され（ひとりっ子対策も2人まで、大学受験も漢民族より低い点数で合格できる等）ているとはいうものの、中国の改革・開放政策、市場経済化は容赦なくこうした分散民族のマイノリテイにも襲いかかっている。

遊牧民の定着化と現金収入源の拡大のための出稼ぎなど兼業化、住居の草原から都市部への移動、漢語の習得や漢民族のもつ慣習・風俗への同化など変化は激しい。

マジョリテイへの同化とともに、葛藤・闘争して温存・持続しなければいけない民族固有の特性・個性が彼らの意志とは別のところで薄まりつつある。これは常にマイノリテイが命脈を保ち続けるために我慢しなければならなかった負の遺産でもあり、それは歴史的にも証明済みである。

本稿では、こうした歴史事情を勘案しながらも今日置かれているモンゴル人の文化や生活実態を、かいまみた内モンゴルの容姿として紹介しておこう。



内モンゴル自治区の首都フフホト、人口146万人を擁し、街は立体交差の自動車橋があり、包頭(パオトウ)までは高速道路が走る。

二、札幌大学と内モンゴル

札幌大学に留学している内モンゴル（内蒙古自治区）からの留学生は、１９９９年9月で20人に達している。これは、外国人留学生の20％弱である。

おもに、内モンゴル自治区の首都、フフホト市及びその周辺地域出身の人々が多い。

フフホト市は、内モンゴル自治区の首都で市域の人口は１４６万人、札幌に匹敵する大都市で、内モンゴル大学、内モンゴル芸術大学、内蒙古医科大学、内蒙古農牧大学、内蒙古師範大学をはじめ、各種大学がある。

内モンゴル大学（学生数４０００人）には、日本語学科があり卒業生は日中貿易や文化交流、観光ガイド、通訳などの仕事に携わっている。

この地域から札大に留学する学生は、単に高校卒業後の進学組だけでなく、教師やジャーナリストなど一旦社会での就業経験のある人たちも含まれているのだ。

日常的にも結び付きの強い札幌とフフホト、札大と内モンゴルの関係をさらに強化するために、山口昌男学長は「札大モンゴル分校」の構想を打ち出した。

モンゴル大草原でゲルに泊まり、ゲルの教室で学び、休息日は乗馬を楽しみながら羊や山羊を追う。草原で暮らす人々と寝食を共にし、彼らの生活スタイルや生活文化を学ぶ。現地でモンゴル語や漢語を学び、日本とモンゴルの交流に役立てる。

現地の人々に、日本語を親しんでもらい、札大留学生をさらに増やす。こうした構想が実現していくことは意味のあることだ。

日本人にかぎらず草原の観光客には、観光用ゲル村で寝泊まりし、モンゴル相撲をみて乗馬体験をする。モンゴル料理に舌つづみを打ちながら、モンゴル音楽を鑑賞する、おきまりのコースが用意されている。夜空に満天の星を仰ぎ、美くしい朝日と日没に感嘆の驚声をあげる。

観光用でない人々の生活舞台であるこうした光景を思う浮かべてみるとよい。

分校の意味は一段と意義深いものになる。

最近、フフホトに限らず内モンゴル自治区の包頭市（人口＝以下同　１８３万人）、赤峰市（４２７万人）、呼倫貝爾盟＝フルンベイル（２６７万人）、烏蘭察布盟市＝ウランチャプ（３３２万人）ほかで、私立大学創設の動きが活発である、との情報がある。また、私立短大はフフホトでも開設されており、卒業生は観光ガイドや、通訳、語学教師の仕事についている。

改革・開放後の内モンゴルでの高等教育にたいする期待感は一層たかまっているものとみるべきだ。

三、インシャン（陰山）山脈とゲゲンダラ草原

フフホトから北のゲゲンダラ草原まではおよそ１２５kmある。途中、東西に長い（約８００km）インシャン山脈を越えなければならない。高さこそ１７００m位の山嶺であるが、北京付近からゴビ砂漠に至る植生の少ない断層山地を形成していて、いかにも緑色のない茶褐色の凹凸山地である。

インシャン山脈にさしかかると、樹木のない裸地性の斜面が続く。雨蝕による削剝谷が大きく下流に向けて口を開けている。大規模な洪水と氾濫の跡だ。

文化大革命（以下文革）までの間は、密植してないものの樹木の分布も見られたが、文革ですっかり裸の山肌になったのだと説明される。

樹木が消え失せれば、水は我が物顔で谷を広げ、岩を削る。橋は流され、道路は河床を跨ぐ。時によってバスは河床を走らざるをえない。

集落の側まできている河床は土砂埋積で数mも上昇して、家々の建物の床水準に達している。

何時、洪水で集落が消滅してもおかしくない状況である。

文革以後、山脈の峠に通ずる道路脇に植え込んだ柳やポプラの広葉樹が、既に10mぐらいに成長しているところをみて、インシャン山脈南斜面にかつて樹林帯が形成されていたであろうことは容易に想像できた。

文革では、中国在住のモンゴル人が南方に追いやられ、漢民族がこの地に入植して耕作地を拡大した。放牧地が耕地に転換していったのである。

断層山地インシャン山脈の山間はかつてモンゴル族の遊牧地域であったが文革で漢民族が入植し、マダラ模様の耕作地を形成している。

牧野の耕地化は、インシャン山脈の丘陵地や山間盆地に限らない。山脈から北の四子王旗（シシオーキ）さらにその北につながるゲゲンダラ大草原のフラットな面にまでおよんでいる。この地方の大きな土地利用転換は、疎放的で低生産力の遊牧を破壊し、より生産力の高い耕地・穀物農業を試行したものであろう。経済優先の思想で伝統的な有畜業を消し去ろうとした錯誤の政策実践の足跡である。

「世界民族問題辞典」（平凡社'95）によれば、文革提起の毛沢東政権を批判した内モンゴル人は内モンゴル人民革命党摘発運動の実施で35万人が冤罪とされ、1・6万人が殺害されたとされている。

内モンゴル自治区のモンゴル人総数が260万人であるから、13％の人々が冤罪にされ、0・5％の人々が殺戮されたことになる。

無差別な逮捕、殺戮は、今日までモンゴル人をして漢民族に恨みや敵対心を持たせる結果となっているのだ。〝地球上でもっとも悪い民族は漢民族だ〟と考えるモンゴル人もいて

おかしくない。民族による他民族の圧迫と粛正は、当世代だけでなく何世代にも渡って心の傷を癒せない。これは今日、多くの内戦、侵略戦経験国で歴史的に証明されている事柄だ。

山嶺を下れば、草原地帯のなかに斑模様に漢民族の耕作する畑地があり、粟、菜種、馬鈴薯、小麦、とうもろこしが栽培されている。

粟は、立派に主食のなかに折り込まれているし、菜種は搾油原料である。

8月下旬は、菜種や粟の収穫時期だ。中型トラクターなどをみることはあるが機械による収穫風景はあまり見られず、手作業中心で農作業が行われている。

馬鈴薯や小麦も、むろん主食である。インシャン山脈北部の平原は穀類や根菜類の土地利用が主力であるが、フフホトからパオトウにかけてのインシャン山脈南部の土黙特（トムド）平原は野菜や果物、それにとうもろこしの主産地だ。

トムド平原は、黄河からの灌漑用水が潤沢で土地利用が集約化している。もちろん、ビニールハウスなど施設園芸も目白押しだ。

これまでの役牛による農作業・農産物の運搬は、小型トラクターにとって変わりつつあるという。

個々の農家がそれぞれトラクターをもつまでに至っていないが、数戸に1台は普及してる。購入できない農家は近所のものを借用している。役牛は急速に減少していて、ほとんど見ることがない。機械力の高生産性にはかなわないとは説明されるものの、手作業農民を多く見受ける。

トラクターのもう1つの役割は、自動車がわりに人の輸送や町までの買物に使うことである。もちろんリアカー

を連結させてである。自家用車が普及していない地域での自家用代用車だ。

草原のなかに、畑地が散在している景色は、日本のような高密度な土地利用景観を見せられている私達にとって、もったいない感じすら抱かせる。

インシャン山脈は円礫を含む河床堆積物が隆起で押し上げられ、後に大きな断層で地塁地形になったものであるが、オランホワからゲゲンダラは黄土高原の黄土(レス)にも覆われている。掘っても掘っても石ころは出てこない。風成層で成り立っているのだ。

黄土は「黄壌」と称され、土質が柔らかく、土地も比較的肥沃である。

黄土形成については風成説と水成説があるが、現在は風成説が有力である。(張天曽:「黄土高原論綱」中国環境科学出版社、1993 213p)

地図でみると、黄土高原は万里の長城より南にあり、とても内モンゴルやオルドスに黄土層があるように思えない。しかし、幅広く覆われていることは実感できる。問題は層理と厚さであろう。

黄土高原の中心である甘粛省東部や陝西省北部は、厚さ180mから200mもの黄土の堆積層があるが、黄土が堆積している地域は中国陸地面積の6%にも達している。6%と簡単に言うが日本の総面積の2倍弱にも達しているということだ。

北に進むにしたがって畑地が減って、一面が草原になる。あと200kmも北上すればモンゴル国との国境でモンゴル高原になる。

ホルスタイン種や黒牛がステップ草原に草をはむ。これらは搾乳用(酪農)よりも肉牛用として飼育されている、

とバイ君が説明してくれた。

四子王旗のオランホワ集落につく。

黄土とも赤土ともいえるレス（Ｌｅｏｓｓ）状の土壌から湧きだす水は飲料水としては適さない。沸かして飲んでも不純物質の混入で美味しくは感じない。

だから、街角や歩道の露店にラグビー型のスイカが売られている。１個２元（30円）はいかにも安い。これは、水分補給にもっともいい果物である。

時折、円礫を含む（過去、河床か湖底であったらしい）土壌の切断面をみることはあるが、概ねレス状の表土が支配している。

ゲゲンダラ草原はフフホトの北約１２５km付近から北に展開する短草々原で、ところどころ観光用ゲル群が林立する。

舗装道路に、青色、黄色、緑色で横２m，縦１・５m位の旗を持ち馬に跨った６人のモンゴル服で正装した若者達が我々のマイクロバスを止める。

歓迎の意を込めて６頭の騎馬隊がバスを誘導しながら、草原のなかを５００mほど走って歓迎門をくぐり、ゲル群の中央広場に到着する。騎馬隊は馬好きのモンゴル人でこの観光事業主に雇われている若者達である。

広場に騎馬隊が整列し、モンゴル服の若い男女６人がお酒「白酒」（バイジュ）を銀杯に注ぎ、バスから降りて来る我々に振舞う。アルコール分50度の焼酎の一種で原料はコーリャンである。

バリア（乾杯）の声で、歓迎の意を示し、回し飲みしていく。その間、整列した男女がモンゴル民謡で歓迎の歌

をうたい、その甲高い声の波が草原いったいにさわやかに染み込んでいった。

昼食は、広場の前のメインビル。地ビール（フフホトビール）と蒙古酒（白酒＝バイジュ）を飲みながら、羊の丸煮をたれで食するものを主に肉饅に似た蒸しパン、にんにくの芽の炒め物、豚肉の角煮、香菜・チンゲン菜・ゆうがおの油炒め、鶏肉をゆで、細切りにした料理などモンゴルのごく一般的な料理が振舞われた。

食材や味付け、盛りつけなどからいって中国四大料理のなかで「北京料理」の範疇にはいるのであろうか。「四川料理」のような辛さはないし、「広東料理」のようなゲテものもない。

食材に新しいもの、生きたものを使う中国料理の根幹はここでも生かされていた。

食事の最中、雇われ歌手がバリトン張りの甲高い声で、モンゴル民謡を唄う。これも、観光地特有の演出で、歌そのものは素晴らしいのであるが、マイクや音響装置の悪さで反響がひどく、雑音程度にしかならない。

かえって演奏がない静かな昼食が草原にそぐわしいし、食事時間後にゆっくりやればよい、と感じた。

ビールとバイジュと昼食の後は午睡2時間が用意された。モンゴル地方では昼寝は一般的である。フフホト市のオフィス街でも昼食は家庭に戻ってとり、その後は軽く眠る習慣がある。

煉瓦ブロックのゲルで休息する。

最近の草原観光ブームを反映して土地の牧畜民が観光事業に乗りだしてきているのだ。中央にレストランや劇場、エキシビジョンホールなどを配置し、その周辺にフェルトのゲルやブロック製ゲルを点在させる。ゲルの屋根にはどれも王朝模様のプリントなどが描かれていて、最高級のもてなしをするのだ、という雰囲気をかもしだしている。

フェルト製ゲルは、泥柳の枝を骨組みに使い、羊の毛で編んだフェルトをかけてあり、普通の大きさで本物に近い。

ブロック製は、水洗トイレや洗面所、シャワー室を装置しベッドや机、椅子、電気スタンドを組み込んだホテル部屋のたたずまいだ。しかし、残念ながら我々の利用した観光ゲルは湯が出ないし、シャワーも水も出ず使用できなかった。

鍵は管理事務所が保管していて、出入りの度にここを尋ねなければならない。

鍵が壊れて利用できないゲルがあり、場所替えに時間がかかる。

こうした状況はよくあることで文句を言うような問題ではない。ここは日本ではないのだ、と諦めるよりしかたない。

我々は、好んで現地人の棲むゲルに宿泊したいと要望していたが、モンゴルのバイ君は、文明人はトイレもシャワーもない宿泊施設は無理であろう、と気を遣ってくれたのだ。

山をテント生活しながら縦走すれば、何日もトイレ、シャワーにはありつけない。こゝはモンゴル、草原の素朴な生活にとけ込むのもいいのではないか。ふと、そんなことを考えた。

午後3時半、草原での乗馬とらくだ乗りの時間である。らくだは曳手がいて無料であったが、乗馬は1時間60元を支払うことになっている。

らくだは背が高く、二つの瘤が柔らかくサドル位置もフニャフニャした安定の悪い感じである。性格がおとなしいから振り落とされることはない。

らくだの曳き車もあり、自由に乗り降りすることができる。

モンゴル馬は、サラブレッドやアングロアラブ種に比べ背が低く、馬体も小型である。瞬発的疾走能力はサラブ

レッドなどの競走馬にかなわないが、長距離疾走や騎馬戦には結構な実績をもっている。

日清戦争や日露戦争では、この大陸で日本軍がモンゴル馬やコサック馬にずいぶん辛酸と苦汁をなめさせられたこととして知られている。

明治期、内閣直属の馬政局を設置し、本気になって馬匹改良に乗りだしたのはこれ以降である。

北見の公務員伊藤さんは、モンゴルで乗馬を楽しむために網走の乗馬場でホーストレールを3回ほどかける練習をしてこの旅に参加した。乗馬への意気込みが伝わってくる。

日本でも、いま乗馬人気は沸騰している。馬産地日高は、かつてシンザンやハイセーコーなど名馬鑑賞のツアーさえ組まれていたが、最近は東京方面から殺到する乗馬希望の若い女性達が多く、各自治体で乗馬施設の整備に取り組んでいるし、自治体の枠を越えてホーストレールを造成しているところもあるほどだ。

ゲゲンダラ草原は、トレールなどはどこにもない。草原すべてが馬場である。

我々のうち8人は2グループに分かれて馬の草原ツアーに向かった。案内者はモンゴル人達で1－2頭の馬が先導する。

最初、30mほど曳き馬に乗せたあと、1人で乗りなさい、と言うだけ。乗馬方法を教える訳でもない。2－3度落馬すれば憶えるであろう、と言った感覚で比較的おとなしい馬をあてがってくれた。

しかし、馬を操ることは難しい。馬が乗り手を馬鹿にして振り落とすことだってある。手綱さばきや〝行け〟、〝止まれ〟も習わないままツアーにでかけることになった。

まもなく、他の馬に蹴飛ばされて私の乗った馬が暴れ出した。馬上からあっさり落馬、鐙に深く足を入れすぎて

いたため、引きずられ足首を痛める。1度落ちると度胸はつく。もう1つの4人グループの若い女性も落馬して手に怪我をしていたことが後でわかった。

モンゴル人は馬から落ちることなど日常茶飯事だからあまり気にしないのか、子供の頃落馬経験があってもそのことを忘れているせいか、あまり気にしていない。

やや40分も過ぎたあたりで若いモンゴル人が手綱裁きを教えてくれた。2本の手綱を左手にもって左右に振れば馬は簡単に向きを変えてくれる、と。

〝行け〟は軽く尻を叩き、〝止まれ〟は手綱を引け、と言う。

そのことを早くいって欲しかった、と思ってもモンゴル語が通じない。

乗り方が悪いせいか、緊張のせいか尻の皮が剝け、ひりひりする。

馬上で感じたことであるが、草原はソフトで乗馬環境に最高であるが、道路など横切るとき硬さが体に伝わって来る。土地条件がそのまま震動の違いとなって馬上の人間に伝わって来るのだ。

草原のところどころには水たまりがあり、山羊、羊、馬、牛などが生育のいい草を喰んでいる。草の密度の濃いところは湧水やたまり水があるところだ。

羊は集団化し易いし、動きも鈍い。山羊が羊の集団のなかに入ることによって羊の集団をばらし、集団を先導する役割をになう。どの羊の塊のなかにも山羊がいるのが面白い。山羊は茶めっけがあって遊び気が強く行動的なのだ。

この地方で飼育されている山羊は、オルドス地方の山羊とならんでカシミヤの原料毛を採るためのものが多い。

広場では見せ物のモンゴル相撲が行われていた。土俵はなく相手を倒せばいいだけのこと。モンゴル国相撲は足取りが許されているが、内モンゴル相撲は足取りは違反。上半身のみの格闘技である。

観客に自信、経験のある人が挑むのだが、やはり現地人の若者は強い。コツを知っているし、体は小さいが地力はある。

鎧に似たチョッキを着て、長靴のような皮ブーツをはいてのモンゴル相撲、見るだけでも楽しいし、どこか日本の相撲にも共通した文化があるような錯覚にとらわれる。

スピードで走る馬上から、地上に舞う紙幣を拾うエキシビジョンもあった。

モンゴル人が馬乗りのうまさを披露するよい機会なのだ。

四、アルデレス草原

8月25日、ゲゲンダラから一旦南に走り、オランホワの街から北西に進路をとりアルデレス草原のバイ・エルヘムト家に向かう。バイ・フホムチ君の弟で獣医をしながら牧場を経営している人の住宅である。

オランホワ街に南下せず、西に直行すればアルデレスまでは近い。しかし、農道みたいなグラベルロードしかなく、かえって時間がかかってしまう。

舗装道路を遠道しても距離は61km、3時間程度でたどり着ける。

オランホワ街には、ピーマン、なす、玉葱などの野菜を路上で直売するためにトラクターにキャリヤーをつけてやってくる農民をみかけた。改革開放政策で農家の農産物販売が自由度を増したのである。

農耕民の漢族が遊牧民のモンゴル族を押し退けて牧野を耕作地に変えたといわれる。文化大革命以後のことであり、草原、牧野のなかにモザイク模様に畑地が展開する。

小麦、燕麦、陸稲、蕎、粟、馬鈴薯に混じって、確かに野菜畑はある。だが決して広い地積を占めているわけではない。この地での野菜はあくまでもマイナークロップである。水の供給に難点があるからだ。

穀物栽培は、数百mの直線的に伸びる畝で栽培されていた。土地の利用度は低く、疎らで畝と畝のあいだは雑草地になっている。

この地帯はステップ気候(乾燥気候)に属する。たまに川から取水して灌漑用鉄管が走っている景色も見かけたが、この水の恩恵に預かれる地域はほんの少しの場所である。緑青々として野菜畑があり、集約的土地利用が行われている。

オランホワから30分も北西に進めば耕作地は消えて、広大な草原が再登場してきた。とにかく広い。

ゲゲンダラ草原よりやや長い荳科系の草が主力であるが、長草草原とはいえない。

羊と山羊の群れがみえる。馬もいる。かつてはゲルがあって移動式遊牧が一般的であった筈だ。遊牧を考える場合、野性動物の家畜化がまずあって、これを飼育するために人間が遊牧の方式をとるに至った、との考え方を示す人もいるが、かえって獣群本来の移動習性に人間が寄生していったのではないか、と考えた方がいい。

草原の上には、日干し煉瓦の家屋が時折地平に突き出すようにたち現れる。

かつてはゲルが存在していたであろうが、今日ではほとんどみることができない。

最近急速に定住化が進んだ結果である。

やがて、シラムルン・スムの小さな集落が現れる。ここにバイ君の弟で獣医のエルヘムトさんがバイクで迎えにきていた。エルヘムト家まではもうすぐだ。

まもなく川を渡る。これは大半が枯れ川、僅かに表土を水が流れている河床幅２００ｍを渡り、農道を暫く走る。金時代の長城跡がある。万里の長城のような構造物があるわけではない。注意されなければ気がつかない、そんな砂丘のような長城は情報伝達の人々が走る丘でもあったし、造成されたころの高さは馬が越えられない５ｍ位と推測されるが、今は２ｍ程度に侵食されていた。

それを横切って再び枯れ川である。

先導役のエルヘムトさんは遠く彼方に消えてしまった。アルデレス草原は広大だ。

バスが砂に捕られて、動かない。13人が下車して砂場から押し出す。水が少しでも流れているとその部分が堅くなっているから埋まることはない。彼方に、エルヘムト家が見えてきた。母屋と物置と家畜小屋の３棟が立ち並んでいる。他に視界に入る家は一軒のみ。

オランホワの街から61㎞、３時間の行程だった。

我々のバスが見えたのであろう。バスを迎えに数頭の騎馬隊が、１頭予備を引き連れ、旗を掲げて走って来る。もちろんバイ君専用の白馬で立て髪が長いのが特徴。19歳の雄であるが、荒れ馬でスピードがあるのだ。

バイ君は、この白馬に飛び乗り迎えにきた仲間、兄弟と実家に向かって走り去る。３００ｍほどの距離を騎馬隊に先導されるようにバスは進む。地平線に霞む広大な草原に存在する家屋群は２つのみである。

エルヘムト家の前に到着した。モンゴル服で正装したバイ君の奥様、中学生になる娘、姉妹、正装はしてなかったが普段着の父母や兄弟が、歌と銀杯の「蒙古酒」で迎えてくれた。この酒は酒精度50度の白酒（コーリャンの蒸留酒）である。バイ君の奥様はフフホトで中学の音楽教師をしているせいか一段と響く美声で「歓迎」の歌を唄う。モンゴル服の女性達は銀杯に酒を注ぎ、遠来の客に飲ませる役割をになう。騎馬隊、歌、酒での歓迎様式は、昨日の観光ゲル村と同じく、いわゆるモンゴル方式であったがやはり中身が違う。ここには心の歓迎があった。ここは今回の旅の最重要地点である。

家の前に急造のゲルがある。かつて移動遊牧で利用していたものを物置から出してきて組み立てたばかりでほこりっぽい感じがする。本物のゲルはやはり魅力的だ。ドロヤナギの骨組にむき出しのフェルトを貼ってある。

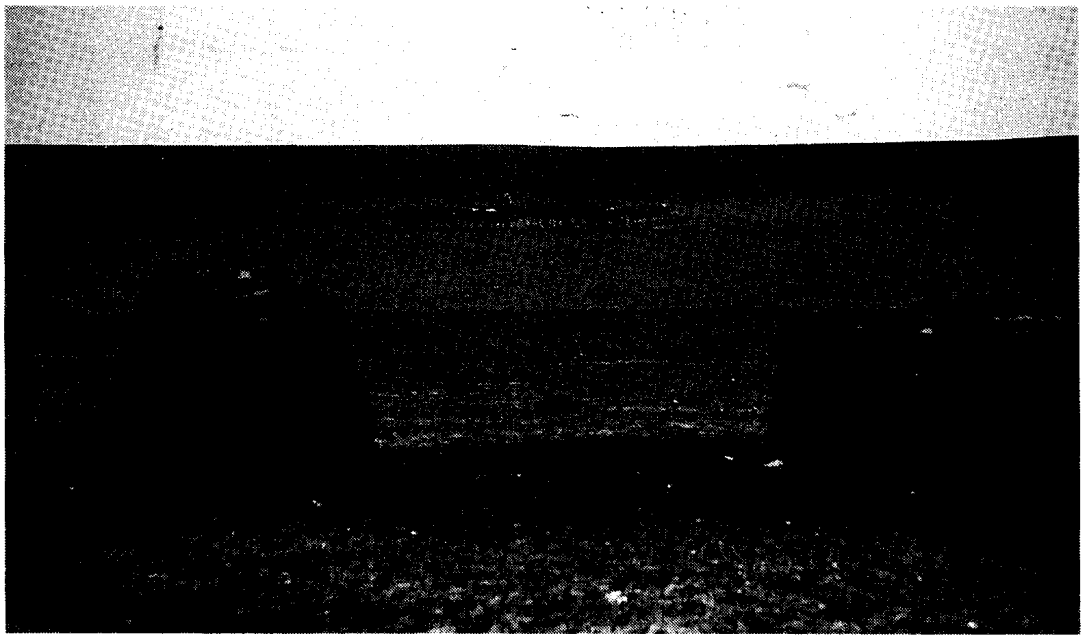
このなかで再び祝杯と肉料理のご馳走になった。スタイツェ（馬乳と茶を混ぜ、塩を入れた飲物）とバオブ（小麦粉をこねて油で揚げた菓子）がでる。ゲルの天井は開いているので内部に暑さがこもらない。厚手の高級ジュータンが敷いてあるが土足で入れという。厚手のジュータンの上に土足であぐらをかくのは落ち着かない。日本人組は靴を脱ぎ、モンゴル人達は靴のままだ。15人程度が座卓を囲む。モンゴル人が半数だ。

母屋から40mほど離れた場所に、我々の訪問に備えて簡易トイレを急造してくれた。

草原に穴は掘りたくないが、遠来の客を迎えてトイレがないと言う訳には行かないとの配慮からだ。

トイレといっても四角の穴を掘り、3方をナマコトタンで囲っただけのものである。

バイ君の末弟でトラクターなど機械修理工の免許をもつサチラトさんは、この場所から南4kmのところで父母と一緒に住んでいる。つまり、家を継いでいるのだ。相続には特に順序がないようだ。



モンゴル族・バイ・エルヘムト家の牧畜。280頭の馬と400頭の羊・山羊を飼育している。両サイドに積みあげているのは羊糞でモンゴルでは貴重な燃料である。

家を継ぐことは多少問題を含んでいる。今日の中国の生産様式は人民公社体制から責任生産制に変わった。土地は国有地であり、土地の使用権は個々の農家にあり、地代は国家に支払う。生産された農産物は農家に所属し販売は自由である。

国家から借地権を得ている農家の子孫が分家して牧畜を営もうとすれば、目下借地している土地を分割して利用することになる。そうでなければ遠く離れた未開地を国家から借用し、開拓しなければならない。

同一借地内で分家・別家するほうが便利である。その結果利用できる放牧地が細分化され、経営規模が縮小する。家畜の頭数が減り、農業収入が減ってしまうのである。

内モンゴル草原地域では、若者の都市への流出がないではないが、牧畜志向がかなり強い。牧場をやりたい人々が多いから農地の細分化は覚悟しなければならない。

アルデレス草原のバイ・エルヘムトさん（30歳）は50平方キロメートルの国有牧野の利用権を得て約２８０頭の馬と４

００頭の羊・山羊を飼育する牧場経営者である。

馬は肉用として、羊や山羊は毛皮、カシミヤ、肉用として販売される。仲買人（馬喰）が庭先にきて交渉販売する。馬は一頭１５００－５０００元、羊は一頭２００－５００元、山羊は２００－４００元である。カシミヤ毛は１頭分１５０－２００元になる。

バイ君は大学をでてフフホトの雑誌社と新聞社で働き、詩人としても生計をたてていたが、いまは札大に留学中。弟はフフホト獣医大で学び、末弟は同じくフフホト会計大の卒業である。

この日、日本から来客があるというので近隣から馬やバイクで10人程度の若者が集まってきた。周辺10km、遠い人は40km先から来ている。近隣といっても遠隔地と言い変えたほうがいいほどの距離がある。みんな20－30歳代で牧場で働いているのだ。誰もが大学は出ていない。馬が好き、家畜が好きで、大草原も大好きだといって牧畜に従事しているのである。

ミルク茶の茶会は食べ物も多く、事実上の昼飯だった。この間、若者達は大草原に散らばっているエルヘムト家の羊や馬を集める作業にあたっていた。牧童の軽い身さばきで馬上から馬群を追う勇壮な景色がそこにあった。

午後の部の始まりは生きた羊の解体からである。60kgの雄羊を1頭捕まえてきて仰向けにし、前両足を片手で握って腹に20cm程度メスを入れる。羊は暴れる気配も、傷みを訴える様子もない。執刀しているのは獣医のエルヘムトさんだ。

内臓が少し露出してくると、その傷口から右腕を奥深く入れて背の近くを走っている大動脈を切断する。その時、

エルヘムトさんは獣医である。60kgのオスの羊を屠殺する。羊を仰向けにし腹20cmにメスを入れ、その傷口から腕を入れ大動脈を切断する。血液は横隔膜に溜る。家畜を苦しめない伝統的な屠殺法である。

羊は少し動くが、たちまちにして絶命した。

羊を苦しませず、血液を飛び散らせず安楽死させていく屠殺技術は長いあいだモンゴル遊牧の伝統のなかで受け継がれてきたものである。

横隔膜に溜った血液は「血のソーセージ」に使い、内臓、肉は食用に、皮はなめして出荷し、骨は骨粉（家畜の餌）や肥料にするため業者が回収にくる。肝臓、すい臓、脾臓、腸、胃袋などが次々取り出される。殆ど無駄にする部位はないのだ。最後に、太股、足が解体され、頭の部分も剝される。解体された部位は種別されてボールや盆に入れて家の中に運ばれた。

女性達は台所で解体したばかりの羊肉、内臓、血液を使ってモンゴル風の料理をつくりはじめた。26～28人分の食事を用意する作業も大変であるが、それは手際よく消化されていく。

夕食が出来るまでのあいだ、馬追いや馬集めの実態が披露された。馬群を纏めて一定の方向に誘導する技は馬と一体化

した騎手の采配次第である。去勢していない雄の暴れ馬、種馬ほどスピードがあり、敏捷である。竿の先に輪の紐をつけて馬群のなかの1頭を捕獲するのも、こうした種馬を使うのがいい。

種馬以外の雄馬は、中性化させるため去勢する。去勢したまま育て販売するが、血統のいい馬は種馬として残す。その場合、調教が必要だ。前足2本と後ろ足1本をつないで動きにくくして立ち棒につないでおく。人間の指示を守るよう1か月ほどかけて調教するのだ。

調教していない荒れ馬でも、鞍のない馬でもモンゴルの若者達は軽く乗りこなす。

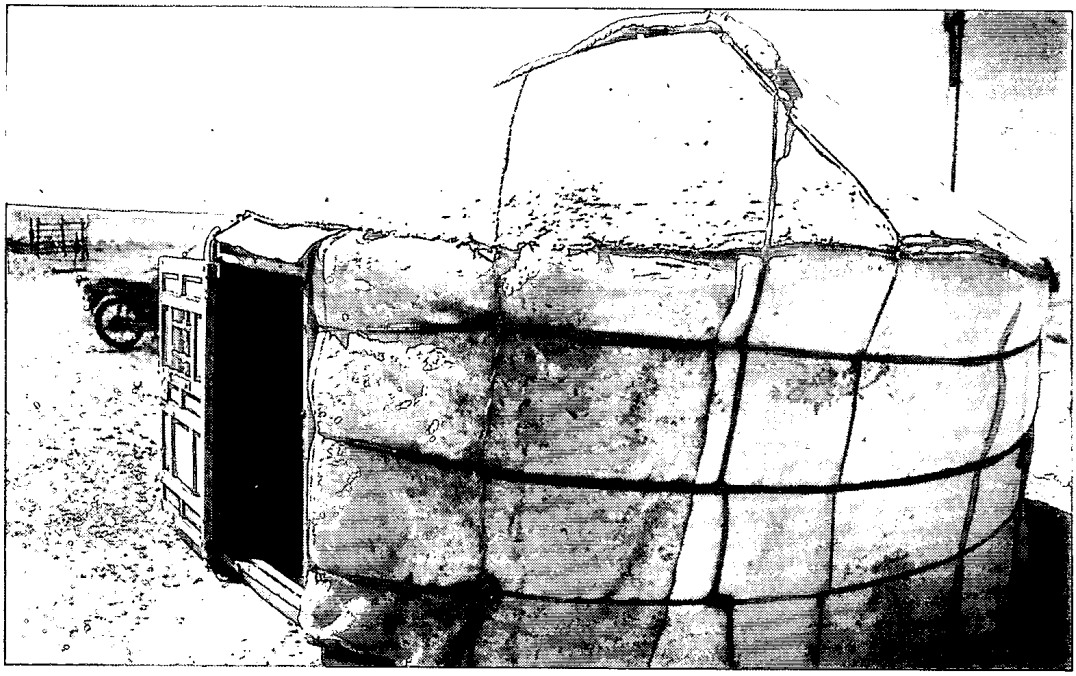
２８０頭の馬群は、２つ位の家族に分類される。自然交配、自然繁殖で人工授精などはしないから必然的に家族分けができるのだ。

最近の馬追いには１２５c.c.程度のバイクも使われる。馬に劣らずスピードがあるし、草原の基盤の硬さがバイク移動を可能にしている。

かつて、この家も春、夏、秋とゲルを移動し、冬は固定した家屋の戻ってきたのだが、今日では定着生活になった。いまはノマドではない。遊牧民の「遊」がとれて「定住牧民」になっている。

アルデレス草原も25年程前の文化大革命で、漢民族が定着し、耕作地を拡大したため、移動式遊牧の余地が狭められたためだという。

草原で若者が羊糞を使い湯を沸かし始めた。羊糞はいたるところ積み上げられ乾燥させている。乾燥した羊糞は特段臭さもなく火力も強い。なんとなく汚れた悪臭のする状況を予測していたがそうではなかった。周りを見回しても生活燃料になる材料は見あたらない。羊糞は古くから遊牧民が考え、実行してきた生活の知恵なのである。



つい最近まで利用していた伝統的なゲル。厚手のフェルトをカバーにし骨組はドロヤナギを使う。屋根中央に穴があいているので中は暑くない。

家は80年代に建てたものだ。材料は日干し煉瓦で外側は泥を塗ってあるから一見ブロック建築かコンクリート造りのようにみえる。ベッドルームは1m程も高く、その下には冬期暖房がはいるコウカンなる構造だ。

若い夫婦が多いから、赤ちゃんも何人か顔をみせた。モンゴル系であり、日本人に似ているせいか、親しみが湧いた。

夕方、大宴会が始まった。凄い料理である。前菜はキューリ、トマト、キャベツの漬物、ザーサイなど。メインディッシュは先ほど屠殺したばかり羊の丸ゆでと丸焼きである。最高級のもてなしをしてくれるが、量が多すぎもったいない感じだ。

バリア（乾杯）で小さな銀杯を飲み干す。何度も繰り返される。言葉も通じないモンゴルの青年達の陽気さと人恋しさが伝わって来る。来年7月はこの地でナーダム（モンゴルの祭り）をするので参加して欲しい、といわれた。

家族の使うモンゴル服を貸衣装に酒を酌み交わし、写真を撮る。誰もが快い酔いに陽気さを爆発させていた。

五、ボルトハイ平野とオルドス平原

フフホト・パオトウ・オルドス地方は奇妙な地理的位置にある。北は東西にインシャン山脈がそびえる。この地域を挟んで北東から南西にかけて途切れとぎれではあるが万里の長城が敷設されている。そのなかをΩ（オメガ）字型ないしΠ（パイ）字型の黄河が湾曲して流れる。丁度オルドス地方の3方を囲むような形で。この付近の黄河の流れを空からみると、竜が寝そべっているように見えるかもしれない。

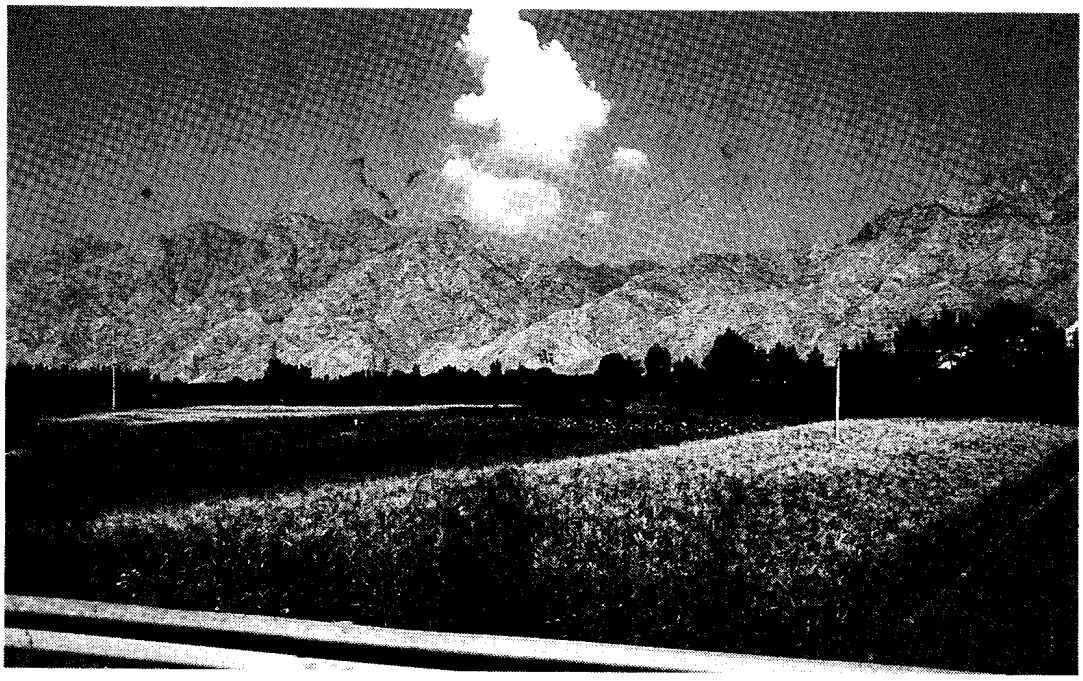
フフホトから西に１５０km、車で2時間半のところに鉄鋼コンビナートで知られるパオトウ市がある。漢字では「包頭」、包はパオ（ゲル）の頭の意味で元々、農耕地帯と牧畜地帯の接点、交易場所として発達した街である。黄河に近く、水の供給に事欠かないこの地域は畑作灌漑農業が広く展開したのである。北のゴビ砂漠周辺や南のオルドスで遊牧が盛んなのは水供給が少ないからだ。パオトウはモンゴル語で「ボゴト」と呼んでいる。

フフホトからパオトウは有料高速道路が走っていて、１３０km制限の標識がでていた。

片道車線だけのハイウェイであるが、日本のものと同じような規格でつくられている。

今年3月、香港－広州間の高速道路を走ったが、中国では近年急速にこうしたハイウェイの整備が進んでいる様子が伺えた。

北側は、灰褐色で植生の見られないインシャン山脈の断層崖がどこまでも直線的に続いていく。断層線で画された平地面、ボルトハイ平野は、それとは対照的に緑の野菜畑や果樹園が展開する。ひまわり、とうもろこし、葱、林檎のほかD型ビニールハウスがあって集約的土地利用の様子が一目瞭然である。



背後は乾燥したインシャン山脈。手前は黄河の灌漑用水でとうもろこしや野菜、果物が栽培されている。フフホトやパオトウが市場になっている。

ここで栽培される野菜、果樹はフフホト（人口146万人）やパオトウ（同183万人）などの大都市をおもなマーケットとして出荷されるのだ。

こうした「緑の地帯」を生み出している背景は黄河の水である。灌漑用水路や水道管により供給された水と化学肥料や輪作など技術改良によるところが大きい。

我々は、内モンゴルの産業をイメージするとき、伝統的な「牧畜業＝遊牧」が支配的、ドミナントの印象をもつ。

確かに、内モンゴル地区の大家畜・中家畜の保有頭数は6000万頭と群を抜いた数で、中国カシミヤの36％がこの地区で生産され、肉用羊は中東諸国、畜産加工品は日本、アメリカ合衆国、イギリス、ドイツに輸出されている。こうした数字からみただけでもいかにも畜産地域ではある。だが、この地域は穀物や工芸作物の生産でも自給を達成して、余剰が生じているのだ。

耕地面積は日本の総耕地を遥かに上回る530万ヘクタールあるが、農業人口が多く、1人当りにすれば僅か0・24

ヘクタールと日本の5分の1に過ぎない農業の零細再生産状況に押し込まれている。

１９９６の統計で見ると、内モンゴル自治区の穀物生産量は１５３億キロ、一人当り６７０キロで中国の省別地位は3位となっている。油料作物（ひまわり、胡麻、菜種、ひま）やビートの生産量が多いことでも知られている。林檎、梨、葡萄の果樹やスイカなどの果菜類のメッカでもある。

とくに、フフホトーパオトウ間のボルトハイ平野は果樹、野菜の土地利用に埋め尽くされていた。

2時間半でパオトウに着いた。

街の南は広大な黄河が流れている。パオトウ付近は黄河の幅が３００ｍから３５０ｍとかなり狭くなる場所だ。増水による水位差は３ｍあるから川幅に変化のでる自然河川である。中国４０００年の農業文化を培ってきたこの黄河は、大量の黄土を含んで極端に黄濁している。文化学部の下川教授がペットボトルに入れて黄河の水を持ち帰ったというので、1年後の水を見せていただいた。すっかり黄土部分が沈殿して土の上は真水のような状態であった。黄河の水は飲めると聴いていた。沈殿させて真水の部分を沸かせば殺菌されるということである。女性たちが、真ちゅうの水汲み柄杓と木桶で黄河の水を汲み天秤棒で担いでいく風物詩も今は水道の普及で見ることができない。

半世紀前は渡船でパオトウとオルドス側と結んでいたが、今は鉄道と自動車の鉄橋が架かっている。双方とも巨大な鉄橋だ。

川幅の狭いことがパオトウをして渡津集落の成立を可能にし、オルドス、トルファンから中央アジアへの門戸の役割を果していたのであろう。

パオトウは中国のなかでも有数の鉄鋼コンビナートで知られている。鉄鉱石は北１５０kmにバインオボ鉄山が、石炭は東30kmのシーグワイ炭田をはじめ、南はドンシン周辺、遠くはタートン炭田からも石炭を供給していると言われてきた。

インシャン山脈周辺やオルドス地方は石炭、鉄鉱石の宝庫である。

パオトウを代表する鉄鋼所「包頭鉄鋼公司」で利用している鉄鉱石の代表は、バインオボ鉄山だ。第２次大戦終末期の１９４４年の発見であるが、東西16km、南北の幅２－３km、面積４８００ヘクタールの鉱床で、埋蔵量は10億トンの怪物鉱床である。

このほか、石英、黄石、リン、マグネシウム、カリウム、金など１４２種の鉱物、72種の化学元素があるというから驚きだ。

包頭鉄鋼公司の粗鋼生産は１９６０年から始まっているから日本の高度経済成長のはじめのころである。粗鋼生産量は４３１万トン、銑鉄４２６万トン、鋼材も３００万トンを超えている。

レール、溝形鋼、シームレス鋼管、線材、鋼材、鋼管などあらゆる鋼鉄製品、素材鋼鉄が製造されているという。〝内モンゴルでの重工業は無理〟といわれたジンクスは見事に跳ね返した。

さらに、〝白鳥は草原から飛び立つ〟でエレクトロニクス産業が80年代にはいって急成長を遂げた。原子爆弾、水素爆弾製造や人工衛星の付属品を供給するほか、テレビ、ラジカセ、通信・放送設備、電子部品、コンピューターなど先端技術も最近定着してきている。

内モンゴル全体の電子工業生産額は10億元（１９９６年）にも達した。

黄河沿いの火力発電所、オルドス地方は石炭の宝庫であり、炭田が多い。ここの電力は遠く北京にも運ばれている。

パオトウに近いオルドス高原南東の黄河沿岸には数10kmの露天石炭層があり、准格爾(ジョンガル)炭田といわれている。確認埋蔵量は268億トン、年間5000万トンの採炭体制で採掘しているが、このスピードで採掘しても500年以上操業できることになるのだ。

この街で生産される鉄鋼は自動車をはじめとする輸送用機械、農業機械、電気機械や軍需産業に供給され、いわゆるコンビナートを形成している。

パオトウには日中・中独の自動車合弁企業での組立工場がある。トヨタ・三菱・フォルクスワーゲン・メルセデスベンツなどである。街のなかでも右ハンドルのランドクルーザー、パジェロ、サンタナ、ベンツがめだつ。国産自動車より外車が多いのだ。

パオトウ市の「北方ーベンツ公司」はベンツ社の生産技術を導入して大型トラックを生産している。8tから20tまでのトラックを年間14車種、6000台、また33tから85tの

鉱山用ダンプカーの生産も盛んだ。こうした産業用機械の生産増強は、一国の工業化の基礎をなすものとして注目してよい。

自動車産業は総合組立であるから、１０００種類以上（1万点以上）の部品生産が近隣地域に成立していなければならない。そうした条件を満たしてはじめて立地が可能になる。

大型トラック部品を主とし、農業・牧畜機械、電器、鉱山、工作、石油化学にかかわる機械等１８００社が立地し一大コンビナートを形成した。

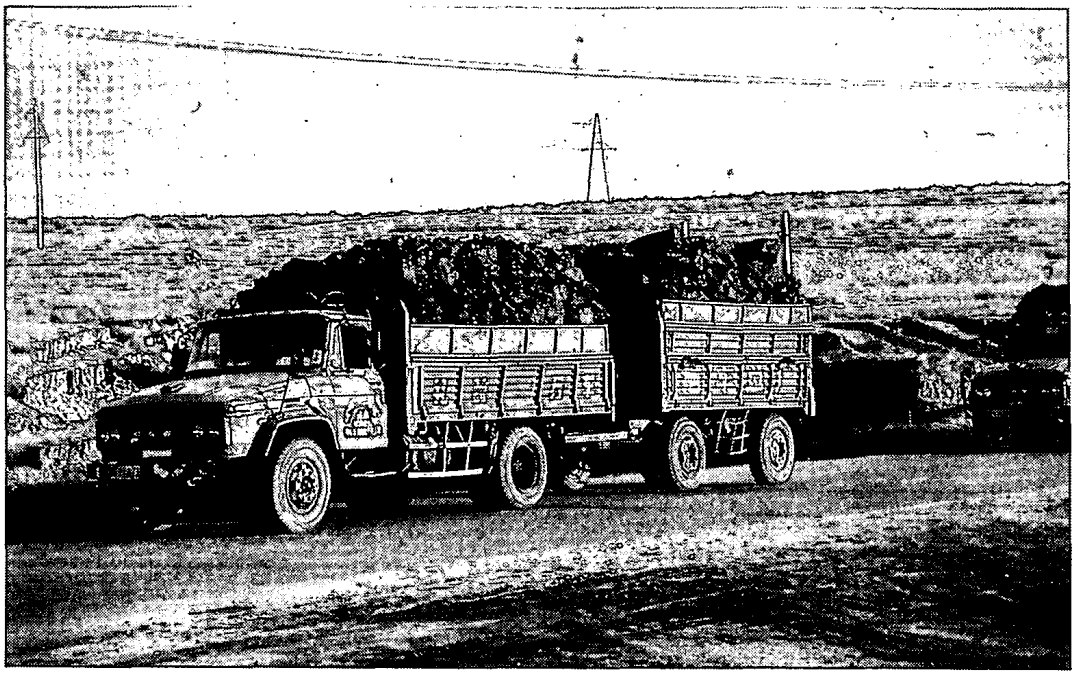
生産されている機械類はアメリカ合衆国、シンガポールなど40以上の国々に輸出されているのだ。

主要先進資本主義国の鉄鋼産業、コンビナートは第二次大戦後、ほぼ一斉に燃・原料立地、つまり資源立地を止めて、臨海立地（交通立地）、市場立地の道を突き進んだ。海上輸送費の縮小に成功し、原・燃料の供給や製品の販売をグローバルなマーケットで勝負するために。

しかし、社会主義国の多くは、いぜん原・燃料立地が主力だ。パオトウコンビナートも例外ではない。輸送費を工業立地の主要因子とした古典的立地論者アルフレッド・ウェーバー理論が生きているのであろうか。あるいは社会主義的生産様式がそれを可能にしているのか。

今回の旅では、鉄鋼所や露天掘り炭田に直接伺う機会がなかったが、その様子をフフホトの内モンゴル博物館に展示された写真や資料でなどで見ることができた。

オルドスにドンシン（東勝）の街がある。漢語ではトンションだ。この付近は多くの炭田が立地する。その代表



オルドスの炭田から鉄鋼都市包頭に向かう石炭輸送車。過重積のこうしたトラックがひっきりなしに北上する石炭輸送専用ともいえる産業道路。

がダラド炭鉱とジョンガル炭鉱だ。約１００km北のパオトウに向かって、数えきるのも大変な2両連結の石炭輸送トラックが走っていく。一般道路というより石炭輸送の産業道路といった方が適切なくらいに。一方では石炭輸送の専用鉄道もパオトウに向かって長い連結車両を走らせているのだ。

パオトウに南接して巨大な火力発電所がある。こうした発電所はドンシン、ジョンガルなどオルドス地方には多い。そして発電された電力は６００kmも離れた北京まで送電されるのだ。この距離はコロラド川フーバーダムの電力をロサンゼルスに送電する長さを上回る。

ドンシン付近の炭田から北はパオトウ、東北のフフホトに向かう石炭輸送用トラックは制限積載量の2倍ー4倍は積み込んでいると思われる。シャフトが折れたり、エンジンがオーバーヒートしたり、ブレーキが焼けきれたりの故障車が何台も道路脇で修理していた。過積載が故障の主原因であることは一見しただけでもわかる。また、車の修理屋も眼についた。故障を前提にして開業しているかのようである。

舗装されているといっても道路は狭く、綻びているしアップダウンも限りなく続く。インフラストラクチャーが未整備なのに許容量を越える車両が通行することで輸送条件はさらに悪化しているのだ。

石炭輸送運転手の報酬は、一般労働者より高いといわれている。運転台には大抵2－3人の運転者が同乗しているのも面白い。人件費が安いのか、修理用要員なのか。

パオトウからドンシンに向かう途中、クブチ砂漠に立ち寄った。黄河の支流が厚さ40－50mの砂砂漠と黄土層の接点を浸食して北に流れている。幅300mほどの河床の高いこの河川は僅かな水が流れていた。河川の氾濫原で野菜や穀物栽培をするため灌漑用水として利用しているので、大河川にもかかわらず車が河床を横断できる程度の水量しかないのだ。

分厚い砂丘地帯を思わせるクブチ砂漠は、観光地になっていてひっきりなしに車が到着する。観光客は砂ばかりの急斜面を裸足で上り詰め、波状の風紋をもつ広大な砂漠を展望して、帰りは急斜面を砂滑りで降りて来る。川べりにはすいかやジュースを販売する露店が5戸ほど立ち並んでいた。

川の右岸は1kmほどの鉄橋が架かっていて長い石炭輸送車がオルドス地方の石炭をパオトウなどに運搬している。「包頭鉄鋼公司」はどの程度の鉄鋼生産量かしらないが、道路と専用鉄道で間断なく石炭が運ばれていく光景は、今日中国全土で生産される鉄鋼が1億トンを超え、アメリカ合衆国、ロシア、日本を抜いて世界一の凄さになっていることを象徴しているように見えた。

六、オルドスの中心ドンシン

ドンシン（東勝）市の天驕ホテル9階から朝の市域と郊外を展望した。標高１５００ｍほどの高原だ。8月26日の朝である。オルドスは地図上で確認する限り砂漠気候が圧倒的部分をしめている。早朝の戸外の気温は12度Ｃ程度。日中は暑くても夜間は冷え日較差は大きい。歩道を歩いている人々はカーデガンのようなものを着用している。

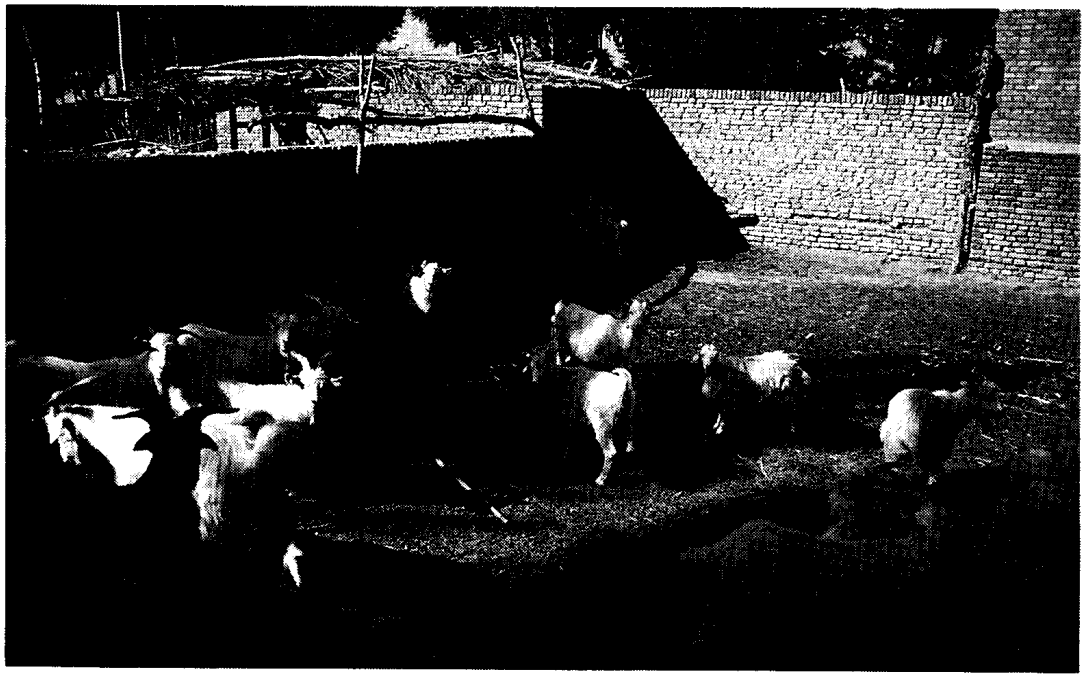
ホテルの東側、すぐ近くに巨大な火力発電所があり、太い煙突から白い噴煙をあげている。この発電所の門の近くには「中日合資会社」と銘打った電子工業の看板もでている。先端技術産業や中軸産業まで外資導入が進んでいるようだ。近くには鋸型の屋根の工場が林立している。

このドンシンの地底には巨大なダラト炭田がある。第二次大戦終了前年の１９４４年発見されたこの炭田は、埋蔵量が１００億トンを超え、しかも良質炭を採炭することができる。炭層は厚く表土が薄いから露天掘りが可能だ。カシミヤの街が石炭の街に変わりつつあるともいえるが、相変わらず繊維工業も健在である。織物産業が盛んな証拠の1つに、織物技術を教える専門学校がホテルの近くにあり、看板がでている。かなり大きい学校だ。

オルドスを走っていると山羊の放牧が多いのに気がつく。山羊だけの場合もあれば、羊と山羊が混じって放牧されていたり、舎飼いされていたりする。山羊の殆どはカシミヤ毛のためのものである。

世界のカシミヤの年生産量は、1万トン弱、中国が５０００トンを、そして内モンゴルが３０００トンを生産している。世界の3分の1がこの地域で生産される。

その主力基地がオルドス高原だ。「オルドスカシミア製品有限公司」は、多国籍企業として13億元もの生産をあ



世界のカシミヤ毛の３分の１は中国のオルドス地方で生産される。その量３０００トン。多くのカシミヤ織物工場がある。

げていて最大級だ。パオトウの「鹿王カシミヤ製品有限公司」も、日本、アメリカ合衆国、トルコなどと合資会社を設立し、「オルドス公司」と同等の生産能力を有する。

日本から設備を導入している会社も数多い。

朝日が上がり始めた遠景は、薄緑に被覆されて一見草原のようであるが、実はセイジブラッシュという砂漠植生に覆われているのだ。砂漠のなかにはクブチ砂漠にみられるバルハン（砂砂漠）もあれば、植物に被覆されている砂漠もある。

ドンシン市の郊外は風成層レスが厚く堆積して浅い浸食谷を無数につくっている。そこにセイジブラッシュが生えているのは、アメリカ合衆国ユタ州のワサッチ山脈周辺の砂漠に似ている。

8月27日はドンシンの街を出て、成吉思汗陵墓を見た後、ジョンガルで黄河を渡りフフホトまでオルドス高原を３４５kmほど走ることになっていた。

成吉思汗陵はドンシンからイジンホロ旗まで南下し、さらに20㎞南にある。もう峡西省に近いあたりだ。

この間のオルドス高原は標高１２００ｍ－１５００ｍ前後の波状台地だが、やや高い丘陵部を除いて畑作地が展開していた。決して密度の高いものではない。疎放的で低生産農業のモデルみたいだ。ひまわり、とうもろこし、馬鈴薯、れんげ、さとうきびなどの栽培である。

道路両側のポプラ、柳の並木が非常に多い。多分、文化大革命以後植樹したものとみえて幼木が目立つ。台地上も松、ポプラなどの植林が盛んで、そのための苗木苗床があちこちにある。

オルドスはモンゴル語で「王宮を守る人」の意味であり、イジンホロも「聖なる主の庭」の意で成吉思汗の霊柩安置の場所を意味するらしい。

一帯の広大な黄土高原は茶褐色の土壌で無数の浸食谷と丘陵を創り出しているのだ。

大草原のなかに５５００平方メートルの大きな成吉思汗陵が姿を現した。モンゴル人は12世紀生まれの彼を民族の英雄として崇め奉っているから、英雄信仰のためにここを訪れる。もちろん漢民族の来訪も多く見かけた。

チンギス・ハーンといえば、我々日本人はすぐに羊肉の焼き喰いを思い出す。彼らも羊料理を好んで食べていたからこの呼び名が出来たのかも知れない。

幼少名テムジン。チンギス・ハーンは１１８９年モンゴル帝国を統一して、盟主になり、以後ユーラシア大陸の過半を支配した。妻をも信じない孤独な独裁者であった。

成吉思汗の3代目にフビライ・ハーンがいた。彼のもとにベネチア生まれのマルコポーロが来て遺えていたことはよく知られている。

成吉思汗陵は１９５４年建立されたが、文化大革命で一度破壊された。成吉思汗は13世紀はじめ病気で没したことになっているが、この陵墓ではなくブルハンに埋葬されている、との記述がある。（「元朝秘史」）又、甘粛省清水検の西江のほとりで病没されたともいわれる。（「ＮＨＫブック」）

陵墓は、中央の正殿と左右に２つの副殿は二重の塔で高さ26ｍもあると説明されたが、面白いことは、この３つの塔がいずれもモンゴル人のゲルによく似ていることだ。

正殿には５ｍの甲冑姿の成吉思汗座像がある。両サイドの副殿は婦人、子供達の霊柩などが安置されている。

陵墓の近くには、成吉思汗らが利用したと思われる雄牛80頭で曳かせた巨大な戦車などを陳列した野外公園があるが、その周辺は観光用ゲルが配置され、宿泊が可能な場所を提供している。

七、オルドスと黄河

オルドス高原を３００km以上走る、といってもこのオルドス地方の東北部のほんの一部を通過するに過ぎない。広大な台地状高原で標高は１２００ｍから１５００ｍ程度であるが、浅い侵食谷がいたるところ削剝しているからミニ・グランドキャニオンの様相だ。アリゾナ州のグランドキャニオンとの違いは台地上にひまわり、小麦、野菜など疎らに植えられていること、羊、山羊の放牧が見えることくらいではないか。

急に大粒の雨が降ってきた。豪雨ほどでもないが、ほんの数分で路面がかなり濡れた。白っぽい大地がやや茶褐色に変わった。もう、枯れた谷底に濁流が流れ始めている。植生の少ない土地は雨を溜める役割を果たせない。１か月以上も雨がなかったからいいお湿りだとガイドが言う。

谷を乳濁色の水で埋めたダムが登場する。灌漑用水のためのものだ。この水が大地の緑を育んでいるのである。

黄河沿いの斜面やオルドスには穴居生活者が多い、といったことは子供のころ地理の時間で習ったところである。まだ、中国の大部分が開放されていない１９７０年代、特殊なルートで黄河地域を訪れた駒沢大の藤島教授は、穴居生活者の多いことを指摘していた。写真を撮ることも当時は禁止されていたが、今は自由だ。

今日でも黄河に近いジュンガルを含む広大の土地に穴居跡は沢山確認できる。でも、生活している人々は決して多くない。ブロック造りの家屋に変更している。横穴居生活している人々の家は入口にガラス戸が打ち着けてあり、洗濯物等がかけてあったりする。廃屋や物置と区別しにくいものもあるが、有人穴居は人のたたずまいの雰囲気がある。でもやはり廃屋が多いのは確かだ。

新しい家屋でも裏の壁面を自然の崖を使ったり、左右2壁面に自然壁を用いる場合もあり、もともと自然をうまく利用してきた形跡はいまでも残されている。

成吉思汗陵からジュンガル、そして黄河を渡りフフホトの手前数10kmまでは道路工事現場の連続。舗装されていた部分を取り壊し、舗装の強度を高めるためにさらに深く掘って基盤工事をする。以前舗装した道路が狭いうえに、破損が著しいのだ。

ガイドが言う〝4トントラックに14トンも積んでいる、規制はあってなきがごとし〟〝この道は10年前に舗装したばかりなのに〟

微細な粒子の黄土が車の通行で風塵を巻き起こし、前方の視界を遮る。ほとんどが石炭輸送車で、一般自動車は

申し訳なさそうに通していただいている感じだ。

車と車の往来も左右どちらでも交差して走り抜ける。ルールは無視されて何時事故があっても不思議ではない。日本のように道路工事現場に交通整理の係をおいていないのだ。果てしなく、こうした工事現場が続いていく。

道路脇によく目につく看板は「汽車修理・板金、溶接、タイヤ修理」である。つまり修理工場、サービスステーションのことだ。ガソリンスタンドと兼用の店もある。

中国では自動車のことを汽車と呼ぶ。

道路脇でトラックを止めて、ボンネットを開けエンジンルームをのぞき込む、ホイールに水をかけ車輪を冷やす、マフラー、シャフトやデフに故障をおこして修理に余念のない人々が目立つのだ。故障するトラックが必ずしも中国産車であるわけではない。日中合弁、中独合弁企業から生産されているものもある。

ここまで自動車と道路を酷使して石炭輸送がペイするのか。インフラストラクチャーはすべて国家がすればこそ成り立つという社会主義的生産様式の舞台を見せつけられたような気がした。計画経済も机上のうえのプランだけでは矛盾がでてくる。フフホトに近い数10ｋｍは舗装したばかりの凹凸のない見事な道路に変身していた。両サイドは10ｍにもなる見事なポプラが並木として育っている。

八、程栄さんの生活

モンゴル自治区の首都フフホト市から北に23㎞、インシャン山脈の頂上に登り詰めたところに武川県青山郷バーデン村の集落がある。フフホトから標高差で５００ｍも急斜面を登り詰めていくが、山頂部は比較的低平な山間盆

地、あるいは高原状をなしている。農業集落が点在しているが、集落の規模は小さく、10戸とか20戸のような単位である。

数１００km北には、ゲゲンダラやアルデレスの大草原が広がり、こうした集落を通過する観光用自動車の往来は頻繁であるが、農業集落が観光客の眼に止まったり、注目されることはまずないといっていい。

山頂といっても稜線は幾つもありインシャン山脈の幅の広さを物語っているし、牧場と耕作地が入り交じっている。じゃがいも、燕麦、大豆、小麦、菜種などが作付されているがその分布は疎らそのもので、牧野のなかに僅か畑地があるといった感じだ。

かつては、かなりの自然林があったが、文化大革命のときに山は裸にされ耕作地が増やされた。遊牧民族が追われ、漢民族が植民してきたという。最近は北斜面を主としてからまつの植林が盛んで、成長したものは10m以上になっている。

金時代の砂を盛り土した長城跡がある。馬が越えられない程度の高さの長城だが今はかなり削られて僅かに痕跡を残しているに過ぎない。アルデレス草原でみたものと異なりこちらの長城は山嶺を繋いでいる。そのそばに第二次大戦前日本軍の建設したトーチカがみえた。モンゴル地区の農村にも日本軍隊の爪痕があるのだ。

トーチカの近くで農夫2人が菜種の苅とり、収穫をしている。手作業であり、機械作業のできる畝の様相ではない。

程栄さんの家は、フフホトに近い山嶺の武川県バーデン村にある。漢人の程栄さんは農業と出稼ぎで家計を支える36歳の働き盛りである。

もともと山西省の出身で、この武川県に来て4代目、父母はいずれも30年ほど前に病死しているが、病名も死去年齢もよくわからない、という。

妻は33歳でチヤハル人（フフホトの隣の地区でモンゴル人）であり、子供は中学1年（14歳）の男子と小学2年（9歳）の女子の2人、いまは近くの学校に通学している。

畑は4畝（120坪）を国家から借りていて、燕麦、大豆、小麦を栽培している。いずれも自給用で主食の材料である。燕麦はもともと馬糧であるが、この地方では小麦粉でつないで「そば」のようにして食べる。フフホトの街のレストランで、この「そば」を食べたが、蕎粉のそばに似てかなりうまい。日本のそばのようによくこねて細く切ったものばかりでなく、餃子状にしたり、団子状にしたり、太く厚く切ったりで幾通りもの食べ方がある。

8月下旬は、収穫の季節でこれらの主食材料が30kg入り程度の袋に詰められて土間に7つほど積み上げられていた。1年間の自給食糧である。野菜畑はなく、必要な野菜は購入している。

家畜はカシミヤ毛を採取する山羊30頭、と黒豚1頭のみである。山羊は公共牧野で、飼育料を支払って管理してもらっている。牧童を共同で雇っているのだ。毎月20元、年間240元を牧童に支払っている。山羊の毛の販売に伴う年間収入は1000元（15000円）にしかならない。

黒豚は11月に屠殺して2月まで家族で食いつなぐ。貴重なタンパク質源である。冷蔵庫のないこの家では、肉などの保存は、冬期の外気温がマイナスになる時期をあてているし、一部は乾燥保存させるのだ。この地域の冬は零下20度から30度になるというからかなり厳しい。緯度は40度Nで秋田県なみであるが　気候は大雪山並だ。

さて、1000元では生活ができないから程栄さんはフフホトに出稼ぎに行く。バスで1時間の距離である。1

回に10日とか20日とか宿泊しまとめて働いて来る。この半通勤的出稼ぎでの年間通算収入が５０００から６０００元になる。仕事は建築、建設現場での肉体労働である。

中国人の平均年収が８０００元程度であるから、まあまあの収入を確保していると思われる。

しかし、かいま見た生活実態は少々異なっているようにも見えた。

１昨年まで土の家に住んでいたが、昨年煉瓦の家を新築した。煉瓦といっても日干し煉瓦のことである。７０平方メートルであるが、物置が40平方メートルを占めている。

家財は白黒テレビと自転車のみ。台所には水道がきているものの土間にある洗面器がシンクである。煮炊きするのに２つの大型竈がある。半世紀前、日本の農村でも囲炉裏から近代的な厨房になる過渡期に普及した竈と同じものだ。

居間、寝室、飯を食う場所は同じ部屋、高さ１ｍもあろうかと思われる寝台がすべての役割を担う。これをコウカンといい、ベッドなど多用途に使われる。寝台の上にはリノリュームが張ってあり、家族４人が就寝する。寝台が高いのはその下に暖房施設がオンドルのように入り込んでいるためである。

この寝台方式は漢民族も、モンゴル族も同じだ。かつて横穴式住居に住んでいたころ湿度避けに高くした伝統が残っているのかもしれない。

台所や暖房の燃料は石炭を使ったり、芝を燃やしたりする。石炭はこの地方では豊かであり、運搬賃程度で手にはいる。

ひと月に支払う水道料金は４元、電気代は15から16元（バイ君の家庭は３人で60元）は差し引かれるが、燃料費

はよくわからない、という。

程栄さんの家を訪れたのは丁度昼飯時、竈でじゃがいもをゆでていた。夫婦で対応してくれたが、物的に貧困であることは否めない。病気になればフフホトの病院に行けるとはいうものの、行った形跡もない。父母の死因も正確な死亡日もわからない。知る必要もないのかも知れない。

同じ部落の家並をみると、家屋も土から煉瓦に変わりつつある。古い家は取り壊したものもあれば、物置に使っているのもある。これからも、生活様式は急速に変化していくであろうことが推測できる。

九、文化複合地帯・昭君の墓、大召寺、五塔寺

王昭君が楊貴妃と双璧をなす美女だったというエピソードはよく知られている。ただし、王昭君は前漢の元帝の妃であるからBC1からAD1にかけての時代を生きたが、楊貴妃は8世紀、玄宗第18皇子の妃であった。比べるには少々時代が違いが大きい。

王昭君は自己意志で匈奴の首領に嫁ぎ、匈奴と漢の善隣友好関係の貢献をしたとの話がある。

2000年も前の史実はとかく尾鰭れがついて伝わっていくもの。王昭君は絵師に自分の似顔絵を描かせたが賄賂を贈らなかったから美しく描かれず、それがかえって良縁をつくりだしたとか、自分の意志で匈奴の首領に嫁ぎ、漢と匈奴との間に友好関係を生みだした、つまり自ら匈奴との融和策のため身を投じたとか、いかにも真実らしく説明される。真実でないという証拠もないのだがおとぎ話的内容のことがらだ。

面白いことは、王昭君という悲劇の宮女は、少数民族であるモンゴル族の「女ヒロイン」として再登場し、漢族

との間に平和の使者としての役割をはたしていることである。もっとも漢族側の少数民族対策の旗頭の意味も含んでいる感じがする。

高さ33ｍの円丘墓の上からの眺望は大変興味深い。一面が平原、とうもろこしと野菜畑の向こうは、東西に流れるやや枯れた川、大黒川（トルグン川）を挟んで北10kmほどに見えるフフホトの街のビル群、その背後はインシャン山脈の乾いた白っぽい山肌が展望できる。東は小さな農村集落とポプラや柳の林の向こうに巨大な石油精製工場、これは１９９２年に生産開始したもので、年間原油処理量１００万トンの生産能力がある。原油は近くの二連浩特（エレンホト）で１００万トンを採取する。

西にはビニールハウスが林立している。このハウスは日本でよく見かけるＤ型ハウスであるが北側の壁と屋根一部は土盛りして中程から南側のみビニールを張る独特なもの。これは、フフホトからパオトウに向かうトムド平野でもよく見かけた。ハウス内は野菜類が栽培されている。

南側は、墓地の催し物広場、その向こうは畑地で、畑を区画するポプラの樹林が目立った。

8月29日は土曜日、「第6回フフホト昭君祭」が開催されていた。見物客も多い。33ｍの墓地の北斜面の半分ほどは幅広い自然石の階段があり、その頂上部に2つの六角堂がある。ここで踊られている宮廷舞踊が眼をひいた。緑、ピンク、赤、青など原色の宮廷衣装にモンゴル人が手にするハドクという赤色の布をもつ。

踊り手は、内モンゴル芸術大学などの学生達で技術的にも鍛えられ、雰囲気的にも古代の宮廷音楽に合った舞台芸術・芸能にみえた。青空のもとの野外舞台であり、石の階段だけに繰り出す踊り手が多いことが雰囲気を盛り上げることになる。

祭りのメインイベントは、5－6歳の子供を大人が2人ずつ背負ってドラ等の音楽に合わせて練り歩くモンゴル独特の行列踊りである。単純な発想であるが、実にうまく工夫したものだ。

祭り衣装に着飾り、王冠に飾り付けをし、ピンクと白の化粧をした子供たちが大人の頭の上に2人ずつ立って、両手を使い踊る仕草をする。。支え手が上手に歩かないと子供は転落してしまう。中国伝統の歌舞劇にヒントを得ているのか、サーカス的要素が折り込まれている。

大人は一本の棒を腰と肩の位置で固定し、頭の付近に子供のお立台をつけ、着飾った子供がそこに立つ。ドラと囃しのリズムに乗って20組ほどの集団が広場を練り歩くのだ。子供も腰あたりまで棒に紐で身体を結んでいるのであろう。衣装に隠れてその様子はわからない。

親子、ないし大人と子供の共演である点もおもしろいが、衣装や子供の仕草にも独自性がありながら統一しているのが特徴だ。祭りの踊りは工夫が必要である。見物客が楽しめ、かつ王昭君の伝統がうまく生かされていた。また、練習量もかなり多いのであろう。転落などはひとつもなかった。30分程度の祭りであるが、支え手の大人は汗びっしょりだ。

フフホトの旧市街区の商店街のなかに五塔寺がある。清の時代（1732年）に建立されたもので琉璃（宝玉の一種）煉瓦で造られ、塔体に1500以上の仏像が彫り込まれている。

五塔寺は釈迦の墓であるが、煉瓦に彫り込まれた文字は漢語、凡語、チベット語、モンゴル語の4種類が並列して必ず使われていることである。

大召寺付近の纏足老婆。近くに纏足専用の靴製造所もあり、10足も陳列されている。

18世紀はじめ、この地はインド、チベットとも交流し、文化を共有しあっていたことを証明している。それは、12世紀の成吉思汗自身、妻としてモンゴル人、チベット人、朝鮮人を嫁っていたことからみても非常に長い期間、東アジアは今より広い範囲での人的・物的交流があったのだ。成吉思汗がこどもをモンゴル人の妻との間のみにもうけたのは純血をまもるためである。

五塔寺を取り巻く旧市街を歩いた。狭い車道から細かい歩道が伸び、袋小路状になって行き止まりの小路もある。人が生活している長屋のうちの一軒を見せていただく。飛び込みであるが暖かく迎え入れてくれ部屋の様子を説明してくれた。台所と居間・寝室・食堂兼用の部屋と二部屋のみで4人暮し。全部で10坪程もあろうか。このあたりの標準的な広さだ。室内はきれいに整頓されている。兼用部屋は何処にでもあるコウカン（高床ベッド）でそのなかに暖房がはたらく構造だ。来年は高層アパートができるので、この旧市街は取り壊されると話していた。

細い小路で椅子に腰を掛け、陽溜りを楽しんでいる老婆がいた。〝纏足ですよ〟とバイ君がいう。

確かに足が小さい。5、6歳の子供の履くような靴である。子供のときから女の足に布を堅く巻き付け、足を大きくしないようにした風習が、まだ年寄りの間に生きずいている。いいところの嫁さんになる条件とか、苦しくとも逃げられないようにしたとか、言伝えがある。

もっと、驚いたことに、大召寺の正門左の商店街入口付近にモンゴル語と漢語で書かれた靴屋がある。漢語では「大召前全技鞋舗」とある。店の中に入ってみると纏足専用の靴屋である。靴の販売もしているが製造元でもある。6段ほどの靴陳列棚には10足程度の纏足靴が並べられていて1人の靴職人が製造や修理をおこなっていた。

これだけの纏足靴の需要があるということは、まだこの付近に纏足の人々が結構な数住んでいるのであろう。

五塔寺のそばに大召寺というラマ教の寺院がある。フフホトには15のラマ教寺院があるが、16世紀後半の明の時代建立のこの寺は最も古く、格式も高い、といわれている。

ラマ教はチベット仏教の呼称であるが、ブータン、ネパール、中国、ロシア、モンゴルに跨る広範囲に宗教文化圏をもっている。ダライ・ラマ、パンチェン・ラマなど活仏信仰も活発だ。

〝セブンイヤーズ　イン　チベット〟が映画化され、ダライ・ラマの幼少のころが登場した。ラマは活仏に違いない。

大召寺の本堂は、金メッキの巨大な法輪、鹿、宝幢（たていし）、飛竜などで飾られ、さながらカトリックのように圧倒する威厳で、宗教を支配の道具にしている権力者の傲慢な姿勢さえ浮かび上がってくる。

内モンゴルでラマ教がイスラム教や他の仏教と同居して育まれているのは文化のクレオール地域ともいえる。

十、おわりに

1999年8月下旬のモンゴル旅は、札大関係者と北海道・モンゴル文化の会々員など12名で編成された。当初8月上旬を予定していたが、夏期休暇中のもっとも旅行費用が高い期間であり、混雑していることから変更することになった。これで10万円程度旅費の節約はできた。安い旅行費用で学生の参加も期待したが、それは徒労に終わった。

旅行の企画は、文化学部3年のバイ・フホムチ君が旅行社との交渉から現地の人々や北海道・モンゴル文化の会との接触、パンフレットや旅行案内の作成、見学場所のタイムテーブルづくりまですべてやってくれた。

昨年の夏は短大の教授陣が、本年8月上旬は経済学部の教授がそれぞれ現地でバイ君のお世話になっているが、さらに追い打ちをかけるような日本軍の襲来でさぞ多忙ではなかったか、神経をすり減らし手抜かりのない処置・処遇をしてくれたことにまず感謝申し上げたい。

旅先に何を期待し、どんなことを見るかは参加者それぞれ異なる。

私は、この3月華南の広州や深圳をみて20年前とのあまりにも大きな変化に魅せられた。日本の高度成長経済での変貌に似ていて「21世紀は中国の時代」を裏ずける変わりっぷりである。内モンゴル地区は中国のなかでも生産力が低く、文化的にも遅れをとってきたイメージがあり、いわば辺境と位置づけられてきた地域である。

フフホト市中心部にはアメリカ合衆国並の自動車専用の高架橋が重なり、走る車はベンツ、ワーゲン、トヨタ、

三菱など外車が目白押し。街を歩く若者は携帯電話ではなし、女性は上げ底の靴を履く。デパートの家具売り場は、これまたアメリカ合衆国を思わせるベッドメーキングされた家具群がならび、カメラコーナーや電気製品コーナーは日本と変わらない。

人々の服装も文化大革命以前の国民服一色ではなく、カラフルかつモダーンである。

だが、一旦旧市街に入り込むと、そこには第二次大戦後の日本、半世紀前の日本がある。瓦が壊れ、ゆがんだ屋根、柱、人と自転車が通れるだけの狭い小路、小路を流れる下水、いろんな種類の使い古し物の販売店、バリカン床屋等々である。

そこに沢山の人々が住んでいる。

新市街地とは対照的だ。このアンバランスが解消される過程がテイクオフ（離陸）になるのかもしれない、と思った。

バイ君が、武装警察のナンバープレートを借用してきてマイクロバスにつけ8日間はこの車で内モンゴルを走った。警察の車ということで街中どこでも駐車は可、有料道路もすべてパス、警察の検問ももちろんない。特権階級の気分になる。社会主義の国だから許されることであろうが、国民の間には不平等感が出てきても不思議ではない。

草原にも大きな変化が起こっていた。ゲルでのいわゆる遊牧生活者が減って定着牧畜が増えてきたことだ。「移動遊牧民」が「定着定住牧民」に変化している。

これも文化大革命以降のことといわれているが、漢民族が遊牧地帯に入植し、耕地を拡大したため、牧野面積が減少しているうえに分家・別家で利用地がせばまっている。

牧畜の傍ら、都市部に出て働く兼業農家も生まれている。そうしたなかで、大学をでた若者達が草原に戻って牧畜に携わるケースは多い、と聴いた。彼らの将来が制限された土地になりつつも、そこには伝統の夢が生きづいているようにもみえた。

内モンゴル自治区が農産物・畜産物で自給を達成し、他の省や地区に食糧を供給していることも驚嘆したが、豊富な地下資源を利用しての工業化のすざましさにも恐れ入った。

経済特別区が増え、外国貿易が盛んになるにつれ、内モンゴルのような資源立地型素材、機械工業がどこまで競争力を発揮できるか。欧米が辿ってきた道、つまり資源立地から市場・交通立地に移動していくのか、を見守ってみたいものである。